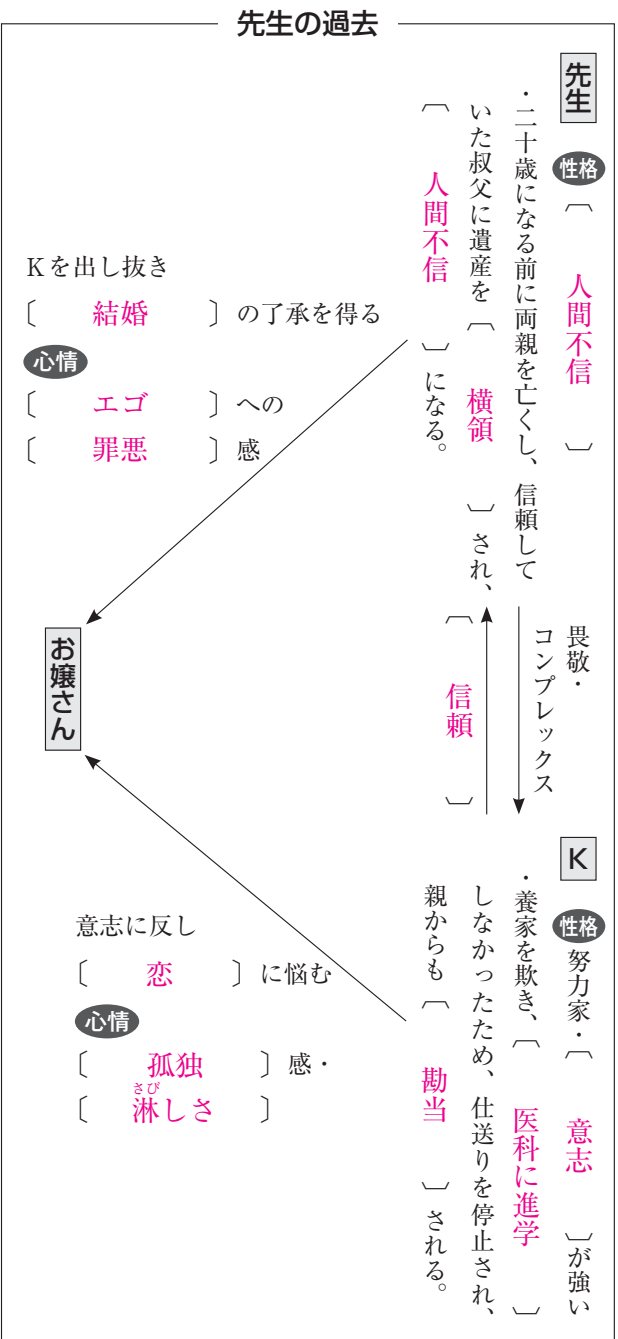


『漱石』登場人物関係図

私 目標もなく「学生生活」を送る。

「暗い影」を持つ「先生の過去」に興味を抱く。

先生からの「遺書」の中で明かされる



夏目漱石について (一八六七(慶応三)年~一九一六(大正五)年)

東京牛込に生まれる。生後すぐ里子に出されたり、他家へ養子に出されたりした。早くから漢籍に親しみ、漢学塾の二松学舎に入学、「**儒教**」的な倫理観や「**東洋**」的な美意識を身につけた。第一高等学校本科に進学。この頃、同級生の「**正岡子規**」から句作の手ほどきを受け、俳句を始める。明治二十三年、「**東京帝国**」大学「**英文**」科に入学。同二十六年に大学院に進学。同二十八年、旧制松山中学に「**英語教師**」として赴任。この松山での体験が、後に中編小説「**坊っちゃん**」を生む。翌年、熊本の第五高等学校に教授として赴任。その後、文部省留學生として「**ロンドン**」に渡った。しかし、日々実感する西洋との隔絶感などのために、強度の「**神経症**」に陥る。この留学体験から、「**自己本位**」の立場を固めた。帰国後、「**東大(東京帝国大学)**」講師を務めながら、高浜虚子の勧めで「ホトトギス」に「**吾輩は猫である**」を連載。以後、「**倫敦塔**」「**坊っちゃん**」「**草枕**」を発表する。文壇は自然主義の最盛期であったが、漱石は余裕を持って人生を眺める立場を崩さず、「**余裕派**」と批判された。明治四〇年、教職を辞め「**朝日新聞社**」に入社。以後、新聞小説として『坑夫』『夢十夜』『三四郎』などを掲載。「三部作」と呼ばれる『三四郎』『**それから**』『**門**』を執筆。途中で、伊豆の修善寺で大吐血し、生死の間をさまよう。この「**修善寺の大患**」は、漱石の間観・死生観に大きな変化をもたらし、エゴイズムの問題を追究した『彼岸過迄』『行人』『**こころ**』が書かれることとなる。このころ漱石は、『**現代日本の開化**』や『私の個人主義』など、講演も精力的に行った。晩年には漱石が到達した理想の境地「**則天去私**」の作品化ともいわれる『**明暗**』の執筆にとりかかったが、病状が悪化し、未完のまま亡くなった。なお、筆名である「漱石」は、故事成語「**石に漱ぎ流れに枕す**」から取られた。(p. 374参照)